

## 高校における英語教育

著者	中川 友吉, 高校英語教育研究グループ, 川畑 松晴, 高下 智子, 竹森 繁治, 寺島 美紀子, 寺島 隆吉, 西貞 捷三, 横川 捷信
雑誌名	教育工学研究 = Studies in educational technology
巻	9
ページ	47-66
発行年	1983-09-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/24855">http://hdl.handle.net/2297/24855</a>

# 高校における英語教育

中川友吉<sup>\*</sup> 高校英語教育研究グループ<sup>\*\*</sup>

## 1. はしがき

1)言語学習の理論は従来、言語研究の理論から大きな影響をうけてきた。戦後の言語学界に君臨したのは構造言語学であるが、これは元来、絶滅に瀕しているアメリカ・インディアンを研究した人類学の一部門である言語調査から出発したものである。これが独立した科学として確立したのはブルームフィールドであつて、文字のない言語をいかに表記するかに始まった音素論を土台に形態素・統合文法素と積みあげて言語の構造を明らかにしようとしたが、意味の領域に関しては余りにも複雑であつて科学的分析は不可能であるとして研究の対象から除外した。この言語理論と行動心理学が組みあわされたのが構造主義の学習理論であつて、言語学習は他の学習と同じく刺激-反応-強化のくりかえしによって得られる習慣であり、外国語学習の場合は母国語との構造の相違を明らかにして重点的に練習を行えば効果があがるとした。

1950年代に名乗りをあげた変形文法理論は、構造言語学の最盛期に到達したIC分析を記号化した句構造規則から出発し、構造が違ってても意味の同じ文を変形規則で説明しようとした。そしてこの統語論を媒介として音声と意味の関係を明らかにしようとした。構造主義の言語学習理論の言語習慣説に対して人間は生れながらにして言語能力をもっているとし、その能力の構造や発達が研究の対象となった。この能力は又理想的な話し手の本能によるものであつて、

構造主義理論によるように実際の言語運用の分析からそのまま得られるものではない。先ず言い違い、躊躇、くりかえし等の偶発的な誤り、更に個人・地域・言語使用場面による相違、最後に前後関係から離脱した蒸溜水のようなものを想定したのであるが、このような要素を重視して果して言語の正しい理解が得られるかは、後の意味論・言語哲学・社会言語学・文化人類学の立場から多くの批判をうけた。

又、構造言語学・変形文法のいずれにおいても最大の構造は文であつて、その下位区分の分析に終わっている。文以上の構造について従来書き言葉では修辞学の段落があるが、話し言葉を含めて談話分析と名づけられ、文以上の構造かその構成要素の連り方にも研究がむけられるようになった。

2)前述の言語並びにその学習理論はわが国においても大きな影響力をもっているが、外国語学習を主流をなす学校教育の指針である学習指導要領の変遷にもかなり強く見られる。例えば、昭和33年の中学校学習指導要領・英語・第3英語についての指導計画作成および学習指導の方針においては、1. 4技能指導の順序、3. 表現できる言語材料と理解できる言語材料の割合、5. 文法用語使用の抑制、7. 日英語の相違、8. 音声指導の補助器材、9. 文法の帰納的学習等、構造主義学習理論の影が強く見られる。又、実際の学習活動においても、聞くこと話すこと、書くことでモデルの真似や暗記・暗唱・置き換え・転換等機械的な文型練習の方法が多くあげら

\* 中川 友吉 金沢大学教育学部  
 \*\* 川畑 松晴 石川県立七尾高等学校  
 高下 智子 石川県立輪島実業高等学校  
 竹森 繁治 石川県立鹿西高等学校

寺島美紀子 石川県立松任農業高等学校  
 寺島 隆吉 金沢市立工業高等学校  
 西 捷三 石川県立金沢女子高等学校  
 横川 捷信 北陸学院高等学校

れている。

昭和44年の指導要領では 第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱いと題目が弱くなると共に、上記の構造主義理論の影響を受けた方針が殆んど削除され、各学年の内容においても学習活動が言語活動と改められ、解説書においてこれは単なる練習ではなく、「実際に耳や口や目を用いて聞いたり、話したり、読んだり、書いたりする言語活動を行わせることが必要である」とし、日常のあいさつをしたり、身近なことや行ったことについて話したり書いたり、説明したりする。又読み方については、まとまりの数個の文、数個の文からなるパラグラフ、数個のパラグラフを読み、その要点をつかむ等、文以上の大きな構造についての学習をすすめているが、言語の形式面である文法の知識の習得、最大の構造として文という構造言語学や変形文法の学習理論をのりこえる伝達理論の展開が見られる。

又、昭和52年の指導要領では、第3は殆んど変わらないが、言語活動では各学年とも

ア、聞くこと、話すこと

(ア)話題の中心をとらえて、必要な内容をききとること。

(イ)話そうとする事柄を整理して、大事なことを落さないように話す。

(ウ)相手の意向をききとって、的確に話すこと。

イ、読むこと

(イ)文の内容を考えながら、音読・黙読したりすること。

(ウ)文の内容を理解して、内容が表現されるように音読する。

(エ)書かれていることの内容を全体として読みとること。

ウ、書くこと

(イ)書こうとする事柄を整理して、大事なことを落さないように書くこと。

(ウ)書かれていることの内容を読みとって、それについて書くこと。

等言語の形式よりも内容の把握に重点をおいた

指導がすすめられている。

3)以上戦後の言語研究と言語学習の理論や学習指導要領について考察したのであるか、我々の当面する高等学校の英語教育の現状はどうであろうか。今日の高校の英語教育は2極に分離している。実業高校や定時制高校においては、低学力の生徒を大量にかかえこむばかりでなく、授業時数も週2時間という所も珍らしくない。従って大部分が学習意力のない生徒をかかえていかに授業を成立させるかが高校教師の大きな悩みとなっている。他方普通高校も学習意力はあるものの進学体制の下に英語学習がゆがめられ、生徒も解放された気持で授業に参加しているとは言えない。

当研究班は金沢大学教育学部の英語教室を主たる会場として、この一年間このような状況にある高校の英語教育をいかに改善するかについて種々の問題を検討してきたが、とりあえず読み方と書き方に関する研究をまとめて発表することにした。最初の「何をどういう風に教えるか」は定時制高校における読み方、書き方の学習において、単文を中心にする文法学習から複文・重文と更に談話分析にまで進める学習方法を理論的に展開したものである。次の「谷川俊太郎とマザー・グース」は関係詞の学習にしほり、左に無限に枝分かれをする日本語の名詞修飾構造と右にのびてゆく英語の修飾構造の2を対比することによって理解を深めようとした実践記録である。次の「1年間をふりかえって」はより全般的な項目にわたる実践例である。最後の「自己表現と英語通信」は普通高校における書き方学習に関するもので、中学ではじまった一定の文型による自己表現のドリルが次第にふくらんでいって自由作文の可能性を示すに至った道程を示している。聞くこと、話すことについては高校の現状においては実施困難のようであるが、本紀要にのせられた教養部1年生の学習に関する「簡易LLによる会話学習」が何らかの参考になれば幸いである。

(中川友吉)

## 2. 何をどんな順序で教えるのか

——「読み・書きの構造表」の確立をめざして——

### 1)はじめに

この稿は第12回中部地区英語教育学会(1982年7月)で発表した「英語教育における「読み」の位置とその指導」の後半部分をなすものである。その目次を再録すると次のようになる。

1. 何のために・どんな英語を
2. 英語教育における四技能とは
3. 日本語を含めて「読む」ことの位置
4. 英語教育における「読み」の方法
5. 授業における内容と順序
6. 授業における技術と方法
7. 残された課題

ここでは上記の4~6、特に5を中心に、枚数の許す限り私の考えを述べてみたい。

### 2)英語教育における「読み」の方法

これまで私は、国語教育の先進的成果の中でも、特に「説明的文章」に焦点をあてて「読み」とは何かを考えてきた。それは日本の言語教育がともすれば文学偏重になる傾向があり、それが日本の言語教育の順調な成長を阻んできたのではないか、という私の考えがあったからである。

日本の民間教育団体の中でも、現場教師によってつくられた新英語教育研究会は、「生徒に、価値ある・心をゆり動かす教材を」というスローガンを掲げて、数々のいわゆる「感動教材」を発掘し、あるいは自ら創作してきたという点で、注目に値する活動をしている。しかしその新英研にしても、発掘し創作した教材中で、説明的文章は皆無といって良い。

しかし直読直解をめざした「読み」、それも「聞く」「話す」「書く」へと発展していく英語力を生徒に身につけさせる「読み」のためには、私はどうしても「文学作品」ではなく「説明的文章」を生徒に与えなければならないと思う。読むに

価値し、それを読むと、新しい発見があり、知的好奇心をゆさぶられる「説明的文章」である。これを直読直解させ、その要点をとらえさせ、さらにできれば、その要点を英語で表現させること、これが日本の英語教育の当面する第一義的課題ではないだろうか。

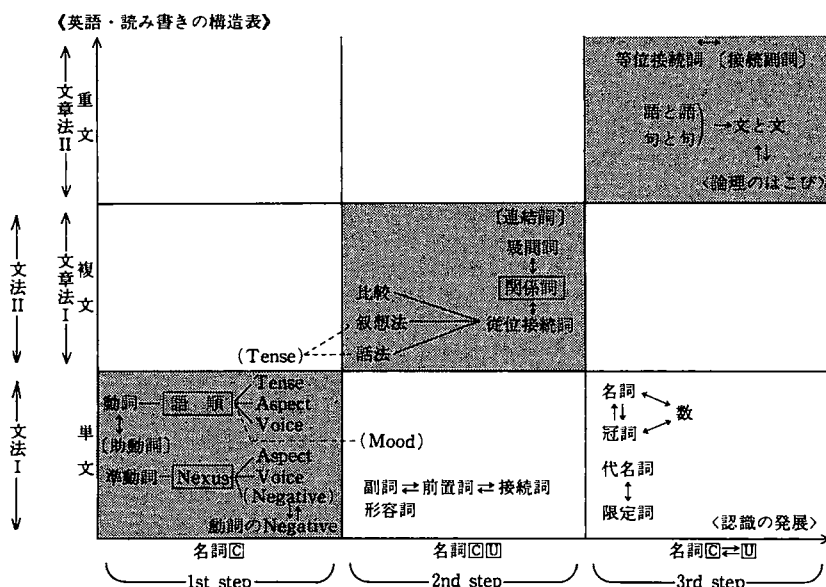
つまり外山滋比古の言うように、いまほど「価値ある説明的文章のアンソロジー」が切に求められている時はない。が仮にそれが実現したとしても、従来のような漢文訓読式の読みでは、上記の目標は一步も前進しない。ではどうすれば良いのか。

それについては今までにもいくつかの方法が提案されてきたが、私にはいずれも「帯に短かし、たすきに長し」であった。そこで私の考えたのは、英文に〈寺島の記号〉なるものを書き込みながら、左から右へ・上から下へと、英文の流れに沿って読んでいく方法である。数学教育における「水道方式」になぞらえて言うならば、さしずめ「書き込み方式」とも名づけることができよう。

私はこの「記号づけ」をしながら様々な英文を読んでみて、たとえば山崎貞『新々英文解釈研究』(研究社)のような受験参考書に出てくる「構文」なるものが、ほとんどその八~九割が、連結詞とその相当語句から成っていることを発見した。したがって「書き込み」をしながら〈寺島のよみ方〉をしていけば、上記の「構文」なるものを丸暗記する必要はほとんどないことがわかったのである。

しかし「読む」ということは英文の一文一文が直読直解できることではない。「要約よみ(しばって読む)」ができるためには、文と文・段落と段落のつながりに注意しなければならないし、「形象よみ(ふくらまして読む)」ができるためには、行間にこめられた筆者の心のゆらめきが感得できなければならない。しかしどうすればこのような方法を身につけることができるのか。それともそのような方法はないのか。

「文学作品」はともかく「説明的文章」の場



合、私はようやくその方法の輪郭が見えてきたように思う。そのポイントは、等位接続詞(及びその相当語句)と指示語に注目しながら、「柱の段落」→「柱の文」→「柱のことば」へとしぼっていくことにある。これは、単文の構造を解明する「文法」に対して、文章の流れとその法則を解明するという意味で「文章法」とでも呼ぶべきものである。

### 3) 授業における内容と順序

次の図は私が『季刊・高校生活指導』59号(1981)に小論を載せた時に、その末尾に掲げた図表である(若干の修正はあるが)。縦軸は文法の順序性、横軸はそれを教える順序性を示している。「文法II」と「文章法I」が重なり合っているのは、従位接続詞で結ばれた複文は、等位接続詞で結ばれた単文と単文の関係に引きもどせることが少なくないからである。すなわち「文法II」はすでに「文章法」の萌芽をその内に含んでいるからである。

横軸の「教える順序性」も三段階に分かれている。この順序は中学校・高校いずれにも通用する。なぜなら高校生であっても、第一段階が十分に習熟・理解されていなければ、そこから

再度ふみ固めなければならないからである。

また横軸の下に □、□□、□⇄□ と書かれているが、これは英語の学習が結局「名詞に始まり、名詞に終る」ことを示している。基本語 1000語→2000語→3000語とレベルを上げていくにつれて、名詞の占める割合は圧倒的に高くなっていく。つまり難解な文章であればあるほど、抽象名詞 □ (しかも音節数の多いもの) が多くなり、また私たちが英作文でつまづくのも、□⇄□ の転換と冠詞の難しさに由来する。

それに引きかえ動詞の場合は、非常によく使われる重要動詞は約100個だけで、この100個あまりの動詞のうち、規則動詞が約50個、不規則動詞が約50個であるという。

このように書くと、いかにも名詞がむずかしく・動詞はやさしそうに聞こえるかも知れないが、実践的には全く逆である。それが構造表の第一段階に動詞を据えた理由である。以下にもう少し詳しく説明してみよう。

まず第一に、単文レベルの直読直解のポイントは語順の理解・把握である。動詞の性格が語順と文型を決めるという点で、まさに英文の「心臓部」は動詞である。(基本型は SVO だ!)

またこのレベルでは、日英語の文構造を比較

しながら生徒の理解を深めさせることは非常に有効な手段である。

TenseとAspectはいったん分離して教えた方が良い。そのことはあとになって準動詞のAspectを教える時にも役立つはずである。

VoiceはTenseとAspectの総復習になる。しかしVoiceがわからない生徒の大部分は、英語での転換よりもむしろ、日本語による「能動文」⇄「受動文」の転換がスムーズにできない。

このことは、日本語には元来「受身形」がなかったこととおそらく無関係ではないであろう。すなわちここでも日英比較は教育上、大きな効果をもたらす。

単文レベルにおけるもうひとつのポイントは準動詞であるが、その際、準動詞におけるNexusを理解させることが最大の焦点とされるべきである。

第二に、複文レベルでのポイントは連結詞とりわけ関係詞である。しかし関係詞の起源が疑問詞または代名詞であることを教えてやれば、直読直解の道はすぐ開けてくる。また前置詞⇄副詞⇄接続詞の相互移行とその区別をいくつかの例文、たとえばafterなどと使って理解させることも重要である。

「比較」は常に何と比較しているのかを問うこと、特に「比較と否定のからみ構文」は日英の発想の違いから説明してやる必要がある。

Mood (叙想法) は従位接続詞ifを使うという点で当然、the second stepに属する。たとえifのないものであっても、その裏にどんなifが隠されているのかを考えさせることが大切である。

またMoodを教える時、英語は(Moodに典型的にみられるように) 動詞・助動詞に感情を込めるが、日本語は助詞(時枝誠記のいわゆる「辞」)に細やかな感情を込めることも説明してやりたい。

Narration (話法) はTense、Aspect、Voice、Moodなどをまとめて総復習する場である。しかし内容をつかみ、「誰が」「いつ」「何を」伝えるのかを具体的に考えることができさえすれば難し

い問題ではない。

第三段階の等位接続詞(とその相等語句)は、それ自体としては難しくない。が論旨をつかむkey wordsとなることは前述の通りである。また例えばandが語と語・句と句を結ぶのか、それとも文と文を結ぶのか、あるいは $a(b+c+d)$ の構造になっているのかをつかむことは、長文になればなるほど困難となる。

名詞と冠詞・名詞と限定詞の関係は、話者あるいは筆者が対象をどのようにつかみ・どのような感情でそれを表現しようとしたのかの反映である。(たとえばaにするかtheにするか。)したがってこの問題は初学者には難しすぎる。「ふくらまして読む(形象よみ)」を必要とする文学作品の読みで問題にすべきことも知れない。つまり私たちの「書く」「話す」レベルでは「数」や「一致」の誤りにそれほど目くじらを立てないということである。

#### 4) 授業における技術と方法

以上のような「読み・書きの構造表」にもとずいて「読み」の能力をつけたいと思っているわけであるが、具体的にはどうすれば良いのか。私の考えは次の通りである。

(1) 先に和訳を与え、段落ごとの要約・全体の要旨を言わせる。

和訳を先に与えることは全く無暴に見えるかも知れない。しかし日本文においてすら要旨をとらえたり・段落ごとの「小見出し」をつける作業は、進学校の生徒にとっても、そんなに易しいことではない。ヴィゴツキーは『思考と言語』(明治図書)の中で、「外国語のこのような意識的・意図的習得が、母語の一定の水準に依拠することは、全く明らかである」と述べているが、だとすればまず母語で要旨をとらえることができなければならない。母語ですらできないことを外国語で出来るはずがないからである。

国語教育がもっと進歩したり、あるいは高学

力の生徒を相手に外国語教育をするのであれば方法は違って来るかも知れないが、当面は先に和訳を与えるのが良いと思う。

和訳を与えるにはもうひとつの理由がある。直読直解が成立するためには「知らない単語が極力すくなく」「文章の背景や概要を知っていること」がどうしても不可欠だからである。同時通訳者も自分のよく知らない分野では、あらかじめ様々な知識を仕入れてから通訳に望むという。羽鳥博愛は「前もって単語を教えよ」と言っている。

先に和訳を与えてしまったら授業で何もすることがないではないか、という声が聞こえてきそうである。そこで最近、私は次のことを提案してきている。

(2) 英文に「記号づけ」をしながら、構造分析をさせる。和訳が必要ならば「ばらし読み」「立ち止まり読み」をさせる。

〈寺島の記号〉を高下智子氏は最近“Reading Sign”と生徒に教えているという。すばらしい命名だと思う。また「ばらし読み」は長部正氏が名づけたものである。連結詞の前でいったん立ち止まって、そこまでをひとつのeye-spanと考える私の「立ち止まりよみ」に対して、さらにそれよりeye-spanの小さい低学力の生徒のために、さらに小さく・句単位にまでばらしながら左から右へと読んでいくやり方である。

ところでわからない生徒にとっては、どこがわからないのか自分にもよくわからないことが多い。だからわからないところを質問しろ、と言われても、質問のしようがない。しかし私の「記号」が与えられていれば「どこからどこまでが( )ですか」とか「それはなぜですか」など、質問のしかたがわかって来る。それだけでなく、記号のつけ方の是非をめぐって、教師と生徒・生徒と生徒の論争さえひき出すことができる。

順序としては「記号づけ」→「ばらし読み」

を考えているが逆の実践もあって良いと思う。つまり「ばらし読み」「たちどまり読み」をさせながら、それに生徒がつまづいたり・それができないような難しい箇所につかつたら、「記号づけ」で英文の構造分析をし、それをめぐって論争をするわけである。

なお「記号づけ」は、極めて簡便な学力テストとして定期考査などに出题するのも良い。驚くほど生徒の様子がわかるはずである。

(3) 「速記テスト」→「暗唱テスト」→「暗写テスト」→「自己表現」の流れの中で、生徒になるべく英語そのものに向き合わせる。

かつての和訳主体の授業では、どうしても生徒は「日本語らしい和訳」をつくるのに多大のエネルギーを使ってしまう。しかしすでに和訳が配られてしまっているのであるから、生徒は自分の和訳が正しいかどうかの不安から解放される。そして「記号づけ」→「ばらし読み」「立ちどまり読み」で日英の論理・語順の違いを体得したら、あとは上記の順序で英語そのものの中にひたらせることである。

定時制のような極端な低学力のところでは(2)と(3)の順序は逆にした方が良いでしょうし、進学校のような高学力のところでは「速記テスト」はなくても良い。

「自己表現」は自由英作文ではなく、当面は重要構文を指定して、それにもとづいて書かせる訓練が良い。要点や段落の小見出しを英語にできればもっと良いだろう。私の場合、日本語による生活作文をなるべくたくさん書かせて、その一部を英訳させている。自由英作文による自己表現以前に、日本語による自由な自己表現すらできない生徒が多いのだから。自分の意見・感想をきちんと日本語でまず表現できることが、英語で「話す」ことの大前提でなければならない、と思うのだがどうだろうか。

(寺島隆吉)

### 3. 谷川俊太郎とマザーグース

#### ——関係詞の新しい教材と教え方——

私は障害児学校から農業高校に転勤して2年目である。これまで低学力の生徒を相手にして悪戦苦闘しながらも〈寺島の記号〉なるものを使って授業をすすめてきた。それを再録すると次のようである。

〈寺島の記号〉

1. 連結詞（従位接続詞、関係詞、疑問詞）は□でかこめ。
2. それでも意味がとれないときは動詞を○でかこめ。(そしてその主語をさがす。)
3. まだはっきりしないときは前置詞+名詞を( )でくくる。
4. 分詞の前、および前置詞の省略されているところにへ(山形と呼ぶ)を入れる。

(寺島隆吉、雑誌『現代英語教育、1980年2月号』、研究社)

この記号は、英文を左から右へ、上から下へと、書いた人の思考をたどりながらよどみなく読みとっていくことをめざすものである。すなわち、関係詞があっても、私自身が習ってきたような読み方ではなく、流れるように目線を走らせて読みとっていくことを目標としている。

そこで①連結詞を□でかこんで、そこでいったん「立ち止まる」、②そしてそこまでの意味をひとかたまりにつかむ(立ち止まりよみ)ことになる。この「立ち止まりよみ」していくときに、私が生徒に教えているのは□で囲んだ連結詞が接続詞であれ関係詞であれ、もともとの意味に立ちもどって考えてみよと言うことであった。whenなどはその典型である。「いつ?」という意味に立ちもどって考えていくことが基本である。しかもwhenは、疑問詞、接続詞、関係詞のどれにもなりうる。

thatなども、もともとは指示代名詞であったものが、接続詞、関係詞として、それぞれ大活躍する。しかもそれが最もやっかいなしろものだといってもよいかも知れない。そこで、この

thatの、しかも関係詞をどう教えたか、をここで報告したい。

関係詞thatといえば、多くの人がマザー・グースのThe House That Jack Builtを思い出されることだろう。

This is the house that Jack built.

This is the malt,  
That lay in the house that Jack built.

This is the rat,  
That ate the malt,  
That lay in the house that Jack built.

This is the cat,  
That killed the rat,  
That ate the malt,  
That lay in the house that Jack built.

というように順々に一行づつまえに増えていって最後の第11連は次のようになっている。

This is the farmer sowing his corn,  
That kept the cock that crowed in the morn,  
That waked the priest all shaven and shorn,  
That married the man all tattered and torn,  
That kissed the maiden all forlorn,  
That milked the cow with the crumpled horn,  
That tossed the dog,  
That worried the cat,  
That killed the rat,  
That ate the malt,  
That lay in the house that Jack built.

これを関係詞の教材とするときに、私は谷川俊太郎・作、和田誠・絵の『これは のみのびこ』(サンリード)を、まず生徒に提示し、読んでやった。それは次のようなものである。



これは のみの ぴこ

これは のみの ぴこの  
すんでいる ねこの ごえもん

これは のみの ぴこの  
すんでいる ねこの ごえもんの  
しっぽふんずけた あきらくん

これは のみの ぴこの  
すんでいる ねこの ごえもんの  
しっぽふんずけた あきらくんの  
まんが よんでる おかあさん

これもThe House That Jack Builtと同じように一行づつ今度はうしろにふくらんでいって、ついに15行にまで達する。絵本では一行ふえるごとに、見開き一ページを次々にめくっていくことになっていて、実に楽しいのである。

これは のみの ぴこの  
すんでいる ねこの ごえもんの  
しっぽふんずけた あきらくんの  
まんが よんでる おかあさんが  
おだんごを かう おだんごやさん  
おかねを かした ぎんこういんと  
ぴんぼんを する おすもうさんが  
あこがれている かしゆの  
おうむを ぬすんだ どろぼうに  
とまと ぶつつけた やおやさんが  
せんきよで えらんだ しちょうの  
いれば つくった はいしゃさんの  
ほるんの せんせいの  
かおを ひっかいた ねこの しゃるの  
せなかに すんでいる のみのぶち

この朗読に、先づ生徒たちはくい入るように見、聞き入った。2年生から英語が選択科目となっていたが、選択していない生徒の間にすら、これを暗唱するのが一時、流行ったほどだった。

それはともかく、まずThe House That Jack Builtを記号づけして読むことから始めた。記号づけは次のようになる。

This (is) the house [that] Jack (built).

This (is) the malt,  
[That] (lay) in the house [that] Jack (built).

This (is) the rat,  
[That] (ate) the malt,  
[That] (lay) in the house [that] Jack (built).

This (is) the cat,  
[That] (killed) the rat,  
[That] (ate) the malt,  
[That] (lay) in the house [that] Jack (built).

はじめのいくつかの連を単語表に頼りながら記号づけしていくと、後はその連想で記号づけてしまうことになる。おまけに単語表は目的語および次の主語になる名詞を左に、動詞を右にきちんと配列したものを手渡してある。

記号づけが完了すると、次に意味をとっていくのだが、旧来のような返り点つき漢文式のよみ方をしていくのではなく、前述したように立ち止まりよみをしていく。その際 that (関係代名詞) は「の一つ手前にある名詞を指示する (関係のある) 代わりの名詞」であり、「立ち止ま」った後の文の中の一要素であることを押さえるのみにする。

訳していくと、つまり英語的に左から右に、上から下に読んでいくと次のようになる。

これは ジャックが建てた家

これは 麦  
その麦は ジャックが建てた家に置いてあった

これは ねずみ  
 そのねずみは 麦をたべた  
 その麦は ジャックが建てた家に置いてあつた

これは 猫  
 その猫は ねずみを殺した  
 そのねずみは 麦をたべた  
 その麦は ジャックが建てた家に置いてあつた

○印の直前が主語であることを毎時間、確認しているの、ここではthatが一つ手前の名詞を指示する(関係のある)代わりの名詞なのだから、「それ」とは、二連二行目のthatならthe maltをさし「その麦」と訳せることを確認していった。しかしはじめ生徒たちは全く同じ様に次のような訳をした。四連目のみを書くと、

これは 猫  
 それは ねずみを殺した猫  
 それは 麦をたべたねずみ  
 それは ジャックが建てた家に置いてあつた麦

なぜ生徒たちはこのような訳をするのか。多分、各連の二行目以後がSVO型であるにもかかわらず、一連目および各連の一行目がThis is the...とSVC型で、それが印象的すぎるからではないか。つまりThis is that ...、this is that ...のように知らず知らず知らずに頭の中に文を作って読んでるように思われる。

ところが、各連の一行目と二行目だけを取り出して、その部分だけを二つの文に分解する作業をやった後では、上のような間違いはなくなっていた。例えば次のように分解させる。

This is the rat that ate the malt.

→ { This is the rat.  
 The rat ate the malt.

二つの文を関係詞を使って一つにせよという

問題ばかりが教科書や参考書には目立つ。が、それよりも実際に英文の読みをしていく時には、どのように意味のまとまりをつかんで読んでいくかが勝負である。だから私は「二文を一文にせよ」式の問題から出発するのは間違いではないかと考えている。

それはともかく生徒たちはこのようにして関係詞を含む文章を、左から右へ、上から下へと流れるように目線を走らせて読むことができるようになった。さらにそれを確実にするために、そうでない読み方、ここでは題して「のみのびこ式」に、これを訳させてみることにした。生徒のノートはあらかじめ縦に二分させておき、左に先の題して「英語的日本語訳」が書き込まれている。その右側が「のみのびこ式」である。さてこれで訳してみよう。

これは ジャックが建てた家

これは ジャックが建てた家に置いてあつた麦

これは ジャックが建てた家に置いてあつた麦をたべたねずみ

これは ジャックが建てた家に置いてあつた麦を殺した猫

『これは のみのびこ』を手本にしてこの作業を難なくやってのけると考えたのは間違いだった。生徒には大変難しかったようだ。

しかし、きちんと「のみのびこ式」につながりを考えて訳せるようになった生徒でも、今度は上のように助詞で切って行を改めて書けないのである。例えば次のようである。

これは ジャックが建てた家に置いてあつた

麦をたべた  
ねずみを殺した

はじめ私は生徒が何故「……家に」と、「に」という助詞で切れないのか分らず、「ここから改行！」などと指示していた。しかし『これはのみのびこ』をよく見ると、全部ひら仮名で書かれていることもあって、①文節(語+助詞)ごとに分かち書きされている、②一回目に登場する名詞は「……のみのびこ」、「……ねこのごえもん」と名詞のままだが、二度目からは「……のみのびこの」、「……ねこのごえもんの」と名詞の後に助詞が置かれ、次の行から新しい材料が登場してくる。

The House That Jack Builtはそれと逆で、既出の材料の前にthatが置かれ、その前に(つまり一行上に)新材料を置く。簡単に言えば日本語が左側に文が伸びる左枝分かれ型であるのに対して、英語は右枝分かれ型であることが実に明解になる。図示してみよう。

- ① This is the house  
    That Jack built.
- ② This is the malt  
    That lay in the house  
                    That Jack built
- ③ This is the rat  
    That ate the malt  
                    That lay in the house  
                                    That Jack built.

①これはのみのびこ

②これは                    ねこのごえもん

                    のみのびこのすんでいる   φ

                                    あきらくん

③これは                    ねこのごえもんのしっぽふんずけた   φ

                    のみのびこのすんでいる   φ

上の図で、下線を引いてある名詞が次の行でthatで受け継がれ文が伸びていくのだが、『これはのみのびこ』では、下線の下にφ(空集合)つまりthatに相当するものがないことが書かれている。

こうしてみるとThe House That Jack Builtを「のみのびこ式」に訳すことの手続き以上の困難点というのは、日本語と英語との根本的な差異にあることが、ますますはっきりしてきたわけである。それは第一に、語順が全く逆であること。英語が「前置詞」で象徴されるように「右枝分かれ」型であるのに対して、日本語は「後置詞」で「左枝分かれ」型である。第二に、英語の関係詞に相当するものが日本語にはないこと。語順がたとえ逆であっても、一対一対応があればまだ訳しやすいが、それが日本語にはすべてあるわけではないからである。私たち日本人が英語を読むときには、そういう意味で、二重の困難に出会うのである。生徒が関係詞に苦しむのには、それだけの理由があったのである。

しかし、私のこれまで述べてきたような新しい指導法で生徒たちは「少しは英語がわかってきた」という顔になってきたように思える。主述関係が、ここで始めてわかってきた生徒もいた。

この授業をこなした現在では、関係詞がでてくると私は「先生は次にどう言うと思う？」と聞く。すると「二つの文に分解せよ」という答が返ってくるようになった。そして『「のみのびこ式」に訳すと……』ということばも、生徒との共通の財産になってきたようだ。

(寺島美紀子)

## 4. 1年間をふりかえって

### — 1学年の教材を中心に —

#### 何のために英語を？

何のために英語を教えるか。私は次のように考えていた。

1. 将来英語を使う。
2. 英語学習によって日本語を再認識させる。
3. 英語を道具として使える喜びのため、文法においては発見、読解においては理解、作文や会話においては自己表現する楽しさを味わうため。
4. 努力と根気を養うため。

#### 現 状

私が勤める高校のここ2、3年の現状を述べると、教師は教科書にふりまわされたという感が強い。生徒が理解しようがしまいが、教科書をこなすだけ。上の4つの目標などとんでもない。生徒は言う。「英語なんてわかるわけがないし、わからなくても生きていける。」と。彼らは英語に対しては嫌悪感より、諦念の方が強い。そんな中で英語の授業は、生徒にとってはひまつぶしであり、教師にとっては子守のように感じられる程であった。

無役と思ひながら授業はできない。そんなことでは力はいらない。そんな思いから、この一年間、次の二点を目標に私達は動き始めた。

#### 授業の目的と対策

##### I. 自学自習の基礎の定着

英語学習のコツ又はすじ道をしっかり教え、(英語嫌いな生徒はこのコツがわかっていない)自学自習の態度を身につける。

そのためには、

- 1). 英語学習の心得を徹底させる。
- 2). ノートのとり方の指導
- 3). 辞書のひき方の指導
- 4). 動詞の変化表のマスター
- 5). R記号のマスター

II. 英語学習を労働としてとらえ、苦しくてもガンバル生徒を育てる。

英語学習は労働のように根気と苦痛を供う仕事である。そのために頭だけでなく、口、手、耳など全感覚を使って学習するよう配慮した。

- 1). ノートの点検
- 2). 筆記体の徹底
- 3). 辞書繰り競争
- 4). 暗記テスト、速記テスト
- 5). 単語テスト

この5点はいずれもガンバレば、努力の成果がすぐ目にみえ、さらに次のガンバリにとつながる。理解力の乏しい生徒にも「ヤッパ」という感激を与えたい。

#### 私の授業

ここでは一学年の授業内容について、特に気をつけたことを紹介する。

##### 1. 英語学習の心得

年度頭初、努力する者には必ず黒点をつけると一年間の方針を述べ、4点セット(辞書、ノート、バインダー、教科書)の必携を約束する。

##### 2. ノートのとり方の説明

ノートは考査直後に点検し、評価をして、平常点として点数化する。

##### 3. 筆記体の練習

中学校では徹底指導されていない。速さ、美的な点で、筆記体はやはり書けなければならない。手紙やクリスマスカードなどを書いて、単調な作業を楽しくした。

##### 4. 辞書ひきの指導

辞書を自由自在に使えることは、自学自習の第一歩である。ところがこの最も大切なことが、体系的に指導されてこなかった。辞書は使いかえわかれば本当に便利な物である。辞書の使用を楽しく習慣化させることに力をいれた。たとえば、辞書は地図のように便利であり、これで「ことわざ探し」や「ダイヤモンドの詩」<sup>1)</sup>を作った。これで生徒は辞書をくれば何とかなるんだなあという実感を深めた。

さらに

- 1). 全員が同じ和英和並用の辞書<sup>②</sup>を購入する。
- 2). 毎日辞書の有無を確認する。
- 3). テストでの辞書使用を可とする。
- (4). 毎日、3分間の辞書速ひき競争をする。

など、一学期間毎日辞書を使って、辞書利用を習慣化した。

#### 5. 動詞変化の徹底学習

英文の中心は動詞である。動詞を楽しく、しかも系統的に学ぶ方法はないかという願いから次のような教材を使った。進行形、完了形、受動態をそれぞれCruel War, Where have all the blowers gone? This land is your landの歌の中で教えた。その後、動詞の変化表で、時制、相、態の変化にしたがって自由に書きかえができるようにした。

#### 6. R記号

動詞の変化がわかったところで、単文における主述関係、修飾関係、文と文のつながりを見きわめるためのR記号(リーディングのための記号又は寺島記号)を勉強した。R記号では動詞部分に○、不定詞に—、前置詞+名詞(名詞のかたまり)に( )、連結詞に□をつける。

#### 7. 関係代名詞

関係代名詞はR記号では□をつける。この連結詞で文と文をつないでいる。そこで立ちどまり訳<sup>③</sup>をさせる。どんな複雑な文もすべて単文のつみかさねで、1文ずつ立ちどまって訳をすれば、難しいといわれる関係代名詞もずいぶんとつきやすくなったと思う。

#### 反省

英語学習の心得の徹底、ノートをとる、筆記体、辞書ひき等を通じて基本的な英語学習の態度は何とか定着したように思う。しかし、動詞変化の徹底学習とR記号づけに関してはまだまだ不十分である。

生徒は機械的にR記号をつけているだけで、なぜ記号をつけるかが十分わかっていない。記号

づけが意味の読みとりに結びついていない。動詞の見わけができないこと、前置詞の意味を知らないこともその一因のようである。このへんをさらに勉強しなければならない。

#### 終りに

「このままではいけない。今年はどうにかしてわかる授業を」と、教研や研究会に顔を出し、素晴らしい教材や先生に出あった。これだと思った教材はどんどん使った。一年間の半分はプリント、半分は教科書というなかで、明日何をするかを前日に考え、早朝学校にきて印刷するという状態であった。生徒には、教科書をやったりプリントをやったり、歌をやったり、ころころ変って、生徒もたいくつはしなかったろうが、実にやりにくかったと思う。こうして私の犠牲になってくれた生徒のためにも、さらに、「やった」「わかった」と感じるような真の意味でも楽しいわかる授業をせねばと思う。

#### 注

(1)和英辞書を使い、名詞・形容詞・動詞をダイヤモンドの形に並べて英語の詩を作らせるもの。例えば次のようになる。

- |              |                    |
|--------------|--------------------|
| 1. 名詞        | cherry             |
| 2. 関連する名詞    | tree, flower       |
| 3. 形容詞(色)    | pink, white, green |
| 4. " (大小、強弱) | small, weak        |
| 5. 動詞        | love               |

(2)『フレンド英和辞典』小学館、稲村松雄編。

これには和英もついているので、作文の時にも使えて便利である。

(3)寺島氏考案の「立ちどまり訳」は連結詞ごとにくぎって訳す方法をいう。たとえば I met a man whom we love. を「私はある男に会った。この男を私たちは好きだ。」のように訳す。

(高下智子)

<資料2>

# Xmas Card

Merry Christmas and Happy New Year!

Dear \_\_\_\_\_

I'm sending a card because I can't be with you this Christmas. I am thinking of you all and also of the beautiful white Christmas at Wajima.

I hope you will be happy to get my present. Enjoy your Christmas vacation. Merry Christmas to you all!

\_\_\_\_\_ with love

● 上にならって Xmas カードを書きなさい。  
(筆記体で)

<資料1>

1年	文法事項	教材	プリント	
一学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>英語学習の心得</li> <li>ノートのとり方</li> <li>筆記体の書き方</li> <li>辞書の引き方</li> </ul>	----- ----- } "Tom's school life" ⑩	① ② ③ ④ ⑤	↑ 辞書と辞書
	<ul style="list-style-type: none"> <li>動詞のつくり (自動詞・他動詞) (現在形・過去形)</li> <li>助動詞</li> <li>代名詞</li> </ul>		⑥ ⑦ ⑧	
二学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>進行形</li> <li>不定詞 (動詞的用法)</li> <li>完了形</li> <li>動詞の変化表</li> <li>受動態</li> <li>不定詞 (名詞的用法)</li> <li>R 記号 (話し合いのたの記号)</li> </ul>	} "Cruel War" } "Where have all the flowers gone" } "This land is your land" } "You've got a friend" } "Tom and his new friend" ⑪	⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱	↑ 暗記テスト
	<ul style="list-style-type: none"> <li>関係代名詞 (who, which, whom) whose, that</li> <li>関係代名詞 what</li> <li>語法</li> </ul>		} "Superman" } "Jokes"	

⑩-教科書 (… Standard English)

<資料3>

辞書読みと練習 (1) 制限時間3分

A-2-7 辞書読み (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20)

B-2-7 辞書読み (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20)

C-2-7 辞書読み (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20)

D-2-7 辞書読み (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20)

E-2-7 辞書読み (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20)

F-2-7 辞書読み (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20)

<資料4>

文中文法

A-4 文中文法

B-4 文中文法

C-4 文中文法

D-4 文中文法

E-4 文中文法

F-4 文中文法

G-4 文中文法

H-4 文中文法

I-4 文中文法

J-4 文中文法

K-4 文中文法

L-4 文中文法

M-4 文中文法

N-4 文中文法

O-4 文中文法

P-4 文中文法

Q-4 文中文法

R-4 文中文法

S-4 文中文法

T-4 文中文法

U-4 文中文法

V-4 文中文法

W-4 文中文法

X-4 文中文法

Y-4 文中文法

Z-4 文中文法

<資料5>

文中文法

A-5 文中文法

B-5 文中文法

C-5 文中文法

D-5 文中文法

E-5 文中文法

F-5 文中文法

G-5 文中文法

H-5 文中文法

I-5 文中文法

J-5 文中文法

K-5 文中文法

L-5 文中文法

M-5 文中文法

N-5 文中文法

O-5 文中文法

P-5 文中文法

Q-5 文中文法

R-5 文中文法

S-5 文中文法

T-5 文中文法

U-5 文中文法

V-5 文中文法

W-5 文中文法

X-5 文中文法

Y-5 文中文法

Z-5 文中文法

<資料5>

文中文法

A-5 文中文法

B-5 文中文法

C-5 文中文法

D-5 文中文法

E-5 文中文法

F-5 文中文法

G-5 文中文法

H-5 文中文法

I-5 文中文法

J-5 文中文法

K-5 文中文法

L-5 文中文法

M-5 文中文法

N-5 文中文法

O-5 文中文法

P-5 文中文法

Q-5 文中文法

R-5 文中文法

S-5 文中文法

T-5 文中文法

U-5 文中文法

V-5 文中文法

W-5 文中文法

X-5 文中文法

Y-5 文中文法

Z-5 文中文法

## 5. 自己表現と英語通信

### 1)はじめに

普通科高校における英語の授業は、文法事項の説明も含め、英文の読みとりが中心で、英作文と言え、和文英訳が一般的なものではないかと思われる。わかりきったことだが、和文英訳だけでは生きた言葉の学習としては不十分であり、自分の言いたいことを自分の言葉で表現する(=自己表現する)訓練がどうしても必要である。そういう思いを実践するのに、生徒にも抵抗が少なく、教師にも過重な負担にならない方法はないかと考えた末にたどりついたのが、以下に述べる「重要語句(構文)を利用した自己表現作文」だったのである。

なお、この実践の対象となった生徒は、私の前任校(普通科、完全な進学校ではない中間校)の1年生38名で、使用教科書はUnicorn English I(文英堂)、単位数は6である。

### 2)重要語句(構文)を使つての自己表現

と英語通信“English Class14”

俗によく「英作文は英借文だ」と言われる。これは、外国語の習得にあたっての「模倣」の重要性をシヤレて表現した言葉である。長崎玄弥氏は、「脱・日本式英語」(朝日ソノラマ)において、語学マスターには「文例の観察→模倣→類推→創造」のプロセスが不可欠であることを強調している。

氏によると①正しい文例の観察→②身近な事柄や最新のニュースの内容をもりこんでimitationを作る(模倣→類推)→③文法規則にかなっていないながら自分独自の表現を創造する(創造)、という過程を経て語学は習得できるというのである。そして次のような具体例をあげている。

(文例) This is the house in which my uncle lives.

(模倣) This is the house in which my sweet heart lives.

(類推) 1. This is the condominium in which Miss Momoe Yamaguchi lives.

### 2. That is the apartment in which the crinual killed the poor girl.

長崎氏のこの本は私に勇気と確信を与えてくれた。

しかし、なにごととも最初が肝心である。生徒たちに「英文を作るのはおもしろそうだ」と思わせなくてはいけない。私はためらっていた。そんなときに、ヒントを与えてくれたのが、『Coinsの歌』(臼杵加菜恵著、三友社出版)である。この本は、著者が中学時代に受けた自己表現英作文を中心とした英語教育の思い出を、具体的な作文例に即しながら綴ったものである。その第7章「今も心に残るすぐれた教材」に、I saw+(O)+~ingの文型を使つての自己表現がとりあげられていた。(同書p170~p174)

三年になってとても楽しい宿題を与えられたことがある。それは日本国憲法和訳とは一味ちがひ、私たちに自由に表現できるものであった。次のような宿題であった。

I saw+(目的語)+~ingの文型を使つて友人や家族のことで印象に残っていることを書こう。  
(それを見たときのあなたの気持ちは……)

そして、著者の級友たちの作品を列挙してあるのだが、その1つを書いてみよう。

I saw my mother cleaning the room.

I saw my mother washing the dishes.

(一生懸命、一日中畑仕事をしてつかれているのに、そうじやおとかなずけまでやるなんて大変だなあ。私もこれから少しでも手伝って楽をさせてあげよう。)

単なる英語学習ではなく、そこには教育があった。人間があった。英語に生命があった。ちょうど私たちもsee(hear)+(O)+~ingの構文を学習したところだったので、「これだ!」と飛び



ENGLISH CLASS 14 *~~~~~* NO.6-2  
Dec.20, 1982

→ 開講技法

1. My mother said to me, "Clean your room."  
=My mother (K.Shukutani)

2. Mr.Takemori said to us, "Write a sentence in English."  
=Mr.Takemori (Y.Moriahita)

3. My mother said to me, "Wash the dishes."  
=My mother (M.Hirano)

4. I said to Fuya, "Don't sleep in class."  
=I (Y.Matoba)

5. My sister said to my mother, "Please give me a cup of tea."  
=My sister (H.Fujii)

6. I said to my friend, "Please show me your notebook."  
=I (S.Teraniashi)

7. I said to her, "Please prepare lunch for me."  
=I (K.Yachi)

8. I said to him, "Please help me with the homework."  
=I (H.Hisada)

9. My brother said to me, "Please make this model."  
=My brother (M.Shinoda)

10. I had a headache, because I had a cold. Then my mother said to me, "Go to bed early." But I had to study, because I was going to have an examination in English the next day.  
=Then my mother (M.Nishino)

LET'S WRITE A NEW YEAR'S CARD IN ENGLISH

Japanese people exchange New Year's cards with their friends, teachers and relatives. You write New Year's cards every year, don't you? I wonder, however, if you have ever written a New Year's card in English?  
You may think it is difficult to write it in English, but you will find it easy if you know how to write it.  
Let me give you an example.

Jan.1, 1983

A HAPPY NEW YEAR!

How are you enjoying the winter holidays? Every day I enjoy watching TV and reading some books I've wanted to read. There are a lot of interesting TV programs about this time of year.

Was last year a good year to you? As for me, it was not a good one. Because my father got ill and there is no hope that he will get well again.

Last year I made up my mind to listen to English at least one hour every day, but I couldn't.

This year I am going to carry out this plan. What did you make up to do this year on New Year's Day?  
By the way, did you eat zoni?  
I usually eat five rice cakes for breakfast during the three days of the New Year.

I hope this year will be a wonderful year for you and your family. And I hope, too, that you will become fond of English. See you again on January 8.

S. Takemori.

ASSIGNMENT  
Write a New Year's card in English to Mr. Takemori.

HINTS  
1. You may use the phrases underlined in the example.  
2. You may use not a special New Year's card but a common postcard.  
3. Write about: what you did during the winter holidays; what you want to do this year; what you think of last year (good or not); etc.

TAKE-SAN'S ADDRESS  
〒726 七尾市坂町 2-97-5

ついた。かくして、私の自己表現作文指導がスタートした。

1 回目はsee(hear)+(O)+~ing、2 回目はI remember(or I'll never forget)the day when...の構文を使っの自己表現である。

2 回目の添削が終った直後に、1 回目と2 回目の表現文の中から取捨選択、プリントし、私の自己表現文もつけて、「English Class14」という名称で発行したのが、英語通信の始まりである。その中のYさんの英文

I remember the day when my grandfather last said to me in bed in the hospital, "You must study hard," but I don't follow his words. I wonder if he thinks of me as a liar in heaven.

が他の生徒への刺激となり、以後、一文ではなく、内容のある短いストーリーを書いてくる生徒が増えてくる。

ここで、英語通信「English Class14」がプ

ントされるまでの過程を述べておこう。

①木曜日に生徒に所定の用紙(資料1)を渡し、課題を示す。

②金曜日に生徒は課題を提出。その日のうちに添削。

③土曜日の午後と日曜日にタイプする。カットには私の長男(当時小1)も参加。これが生徒の人気をよぶ。

④月曜日午前中に印刷。午後の授業の最初に配布する。添削した作文を本人に返す。

かなりの時間と労力を要したが、非常に楽しい作業であった。No.1には選択して生徒の文を載せたが、わずか三十数名の生徒、プリントに載らない生徒にすまない気がして、No.2からは提出者全員の文を載せることにした。そのため1回のプリントが2枚になり、作業量は倍増したけれども、生徒に評判が良く(アンケートによると、38名中33名が「English Class14」はinterestingと答えている)、欲が出てきて、CROSS

WORDや歌や物語を載せるなど工夫をこらしていった。

課題として与える文例は教科書のキー・センテンスあるいは重要と思われる語句、とくに長崎玄弥氏の言うように、身近な事柄の他に最新のニュースの内容などをもり込めるものをと心がけたつもりである。また、heとかsheは使わず、出来るだけ具体性のある文をと呼びかけた。

1年生の場合は身近なことが多いが、2年生にも作らせてみると、

○I hear the dung of pets has polluted some streets in Europe these days. (女子)

○I hear the farmers are in trouble they have grown too many Chinese cabbages these days. (女子)

のような文が出てくる。短い英文の自己表現によって社会へ目を向けることも可能なのである。

自己表現＝英語通信の実践の過程で再確認したことの一つは、生徒の自己表現文がすばらしい教材となるということであった。それは直接語法の自己表現文を作り、それを間接語法に直す課題を与えたときのことである。集ってきた生徒の英文を分類・整理すると、語法の転換のりっぱな問題集ができあがった(資料2)。

アンケートによると、38名中24名は自己表現活動はinterestingであると答えている。積極的に活動に参加したMさんの自己表現作文の歩みを見て、この章を結びたいと思う。

①I remember the day when she gave me a fairy book.

②My father gave me a mystery on my birthday last year(11/17). The book was so interesting that I could read the book faster than the other books.

③These days I am interested in chatting with my friends.

④I have pvt on weight lately. So I decided to do jogging and I practice it from time to time.

⑤I like to read mysteries. I like mysteries

by A. Christie best of all the books I have ever read. I buy books twice I a month.

⑥I read my diary. It was as follows:

“November13,1982. We have a practice game tomorrow. Maybe we will take the eight-nine a.m. train. I will ask Mother to wake me up at six thirty and to make my lunch. We will of our best tomorrow. Then good night.”

⑦I had a dream: It was dark and silent all around. Suddenly I heard a voice from heaven. It was the voice of God. God said to me, “You are an honest girl. I’ll hear one of your prayers. Tell it ts me.” “One prayer?” I said to God, “Then it is that one hundred prayers of mine will be heard.”

⑧A Happy New Year!



How are you enjoying the winter holidays? Every day I work for a post office and I’ll serve as MIKO during the three days of the New Year.



This year I want to read many books, especially mystery books. What do you want to do this year, Mr. TaKe-san? Zoni is too delicious for me to become thin.

Now, I hope this year will be a wonderful year for you and your family. Now good-by until January8.

ペーパーテストでは平均点並みの成績だが、推理小説を好み、剣道部に所属する明るく快活なMさんである。ペーパーテストの成績だけからみていたら、英語のあまり得意でない子としか評価されなかっただろうが、彼女のユーモアあふれる英文、実にすばらしいではないか。離任式のあと、廊下で涙に目をうるませながら別れを惜しんでくれた彼女の姿が忘れられない。


DEAR MR. TAKEMORI  
A HAPPY NEW YEAR!  
Jan. 1, 1983

How are you enjoying the winter holidays?  
As for me, I go to club of kendo, every day.  
Was last year a good year to you? As for myself,  
I had a good year, because I passed the exam  
for first class of kendo. 剣道一初級(5.7.4.4?)  
I think you had a good year too, because  
you passed test for a driver's license.  
I hope this year be a wonderful year for you  
and your family, and you will be a  
good driver.  
普通運転者ですいまけん。  →   
my number is 12/2 S. Taubai

A HAPPY NEW YEAR!!  
IT'S new year! This year I'm going  
to learn how to TYPE.  
Fun for every day in the year.  
I hope this year will be a wonder-  
ful year for you and your family!!  
   
Jan. 1, 1983  
YOUR STUDENT  
Y. MORISHITA



ENGLISH CLASS 14 1111111111 NO.8-1  
Jan. 17, 1983

I am very glad that most of you wrote a New Year card  
in English to me. These are the New Year cards from  
you to me. You have made some errors, so I have  
corrected them. And my answers are given.

..... 

TAKE-SAN'S ANSWERS



1. Jan. 1, 1983  
DEAR MR. TAKEMORI,  
A HAPPY NEW YEAR!  
How are you enjoying the  
winter holidays? As for me, I  
go to the club of kendo every  
day. Was last year a good  
year to you? As for myself, I  
had a good year, because I  
passed the test for shodan (1st  
grade) of kendo. I think you  
had a good year, too, because  
you passed the test for a  
driver's license.  
I hope this year will be a  
wonderful year for you and  
your family, and you will be a  
good driver. (S. Taubai)

 → 



2. A HAPPY NEW YEAR!!  
It's new year! This year I'm  
going to learn how to type.  
Have fun every day.  
I hope this year will be a  
wonderful year for you and  
your family. (Y. Morishita)

3. A HAPPY NEW YEAR!  
1983 wild boar year  
I'm sorry that I was late in  
sending a New Year card.  
Please don't be angry with me.  
By the way, how are you spend-  
ing the winter holidays?  
As for me, a few days ago I  
went to Kanazawa to see the  
popular movie "E.T." I could  
understand well why this  
movie touches people's hearts  
all over the world.

1. Congratulations on  
your passing the test  
for shodan of kendo.  
I'll be careful when  
I drive a car and try  
my best to be a good  
driver.

2. Then you'll be able  
to type your English  
sentences, won't you?  
Will you type for me  
if I ask you to?

3. A fellow teacher of  
mine told me she was  
very much moved by  
the film "E.T."  
I want to see it, too,  
but I don't feel like  
going as far as  
Kanazawa to see it.

### 3)英文年賀状の実践

少しずつ英文を書くことに慣れてきた生徒たちに、冬休みの課題として私が要求したのが、英文年賀状である。生徒には書き方を教えて、私宛に英語で年賀状を出すように指示した(資料3)38名全員に私から年賀状を出してあったこともあってか、33名からの年賀状が集った。私はそれらを次のような過程を経て生徒たちに返していった。

- ①1/8(土)の午後、年賀状を全部コピーしてプリント9枚にまとめ、1/9(月)に生徒に配布(資料4)
- ②そのプリントを使って、各年賀状を添削。
- ③私の手を加えた英文をタイプ。それぞれの年賀状への私の返事もつけて、プリント6枚に印刷。"English Class14" No8-1~No8-6として1/17(1週間後)に生徒に配布(資料5)

### 4)むすび

最後に、私についてきてくれた生徒たちに感謝しつつ、実践をふり返っての感想をまとめて、報告を終わりにしたい。

- ①長崎玄弥氏の主張でもわかるとおり、重要語句(構文)を使っての自己表現は英語学習では欠かすことのできない過程である。しかし現実にはこの面がおろそかにされているのではないだろうか。将来のspeakingの基礎としての自己表現作文をもっと英語指導にとり入れるべきではない。
- ②重要語句(構文)の中でどれを選ぶか年間計画を立てられるとよい。生徒には内容のある例文を示して、刺激を与えることが大切である。同時にsheとかheではなく具体性のある文を書くように指導する。
- ③自己紹介文、年賀状、その他トピックを与えるの自己表現作文なども計画的に書かせた方がよい。

- ④英文を作ることに抵抗のある生徒もいるので、
- ②を主にして継続的に行い、③は学期に1回ぐらいでもよいのではないか。もちろん書ける生徒には長いものを書かせればよいが、教師の方の負担も考えると、字数を制限した方がよいだろう。
- ⑤教師の方も生徒といっしょに自己表現をすること。スピーチという形でよいし英語通信を通じてでもよい。
- ⑥英語通信という形式をとる、とらないは別としても、生徒の自己表現文は、個人個人には添削して返すと同時に、プリントして全体に返し

た方がよい。クラス数が多い場合は、内容のすぐれたものを取捨選択してプリントするのがよいだろう。

⑦この方法をとれば、ペーパーテストでは計れない生徒の能力を引き出せるし、生徒理解の助けにもなり、生徒との結びつきも強くなる。

⑧私としては、重要語句(構文)を使っての自己表現は、全ての生徒が参加できて、教師の負担も比較的軽く、長続きできる方法だと思うし、①、⑦の理由からも、今後ともこの方法を追求してゆきたいと考えている。

(竹森繁治)

ENGLISH CLASS 14	NO.12 Feb.28,1983							
<u>Reading Marathon</u>								
<b>CONGRATULATIONS, MATSUMOTO-KUN!</b>								
~ Matsumoto-kun is the first to reach the goal. ~								
.....								
<p>'Reading Marathon' is the name given to a reading contest. In this contest you must read the following seven stories as fast as you can.</p>								
<p>NO.1 'A WISE MAN' NO.2 'WILLIAM TELL' NO.3 'DOCTOR GOLDSMITH' NO.4 'ANDROCLES AND THE LION' NO.5 'THE MILLER OF THE DEE' NO.6 'GRACE DARLING' NO.7 'CORNELIA'S JEWELS'</p>	<p><b>INTERVIEW</b></p> <p><b>Take-san:</b> How did you like the stories?</p> <p><b>Matsumoto-kun:</b> I enjoyed reading them. I spent only 30 or 40 minutes finishing one sheet.</p>							
<p>(All of these stories are the ones from 'Fifty Famous Stories' retold for Japanese boys and girls.)</p>								
<p>This marathon was started on February 5 and on February 26 Matsumoto-kun of Class 11 reached the goal first, that is, he is the first to finish reading all the seven stories given above. I hope all of you run the whole distance. These stories are not so difficult and I'm sure you will find reading them is a lot of fun. The following list shows where you are running now.</p>								
<b>WHERE YOU ARE RUNNING NOW (Feb.26,1983)</b>								
NO.	NAME	1	2	3	4	5	6	7
1113	H.Nakanishi	2/9	2/14	2/24				
1114	K.Nakamura	2/12	2/14	2/16	2/17	2/25		
1116	H.Hashimoto	2/12	2/14	2/15	2/16			
1117	N.Matsumoto	2/7	2/14	2/15	2/16	2/17	2/25	2/26
1118	T.Yamagami							
1119	M.Yamazui	2/7						
1120	O.Yoshimura							